

ろう、みなあわてず、一斉に空に向けて激しく小銃を撃ち続けた。おかげでオオカミは退散したらしく、あたりはもとの静けさに戻った。本物のオオカミは見られなかったが、実に恐ろしい、私にとっては二度と会うことのない出来事だった。

わずか二年間とはいっても、私にとっては、生涯頭から切り離されないであろうシベリアの過酷な、言語に絶する重労働と餓鬼牢獄から解放され、二十二年の五月二十八日、懐かしいこの祖国へ、引揚船高砂丸で帰還することができた。

シベリアの思い出

兵庫県 中山 実雄

私は、昭和十七年一月十日、杉江西部六四部隊に入隊。三月十日まで訓練を受け、三月十九日、屯営を出発して、満州黒河第八四部隊に入隊いたしました。満州の寒さ、殊に北の果て黒河は、内地で想像する以上

の寒さでありました。八四部隊の生活は、内地の教育と違って、現役兵のバリバリで、とてもとても厳しいものでありました。ここで約一年、その後、新京関東軍經理学校に入学し、ここで約一か年勉強をいたし、原隊に復帰し、主計伍長に任官とともに、関東軍情報部哈爾濱陸軍特務機関に転属、任務に精励いたしました。

昭和二十年八月十五日、終戦を一面披にて迎える。これから自分の捕虜生活が始まりました。シベリア出發までは、海林、牡丹江の収容所にて何をするともなく毎日を送る。いよいよ満州にも冬が目前に訪れ、寒くなる。ある日、収容所長が訓辞をした。君たちは近日中に妻子の待つ母国へ帰ることができると言った。みんな喜び合った。そのうちに命令が来て、列車の準備が始まった。列車内に水を積み、そしてまき等も積み込んで出発を待った。列車が動き始めた。その列車たるや、貨物列車の有蓋車である。ストープはドラム缶を切ってつくったものである。でも、我々は帰れる喜びでいっぱいであった。

国境の綴芬河を通過して、いよいよソ連の地に入る。

その列車内で、だれが言い出したか、「おい、太陽の出る方向がちょっとおかしいではないか」と言い出した。考えてみると、そのとおりである。反対の方向に列車は走っていた。某大尉が輸送指揮官であったので、ちよつと尋ねてみた。隊長も自分たちと一緒に不思議に思っていた。我々はどうやらシベリアに連れていかれていると話した。ここで、我々兵は、度胸を決めて致し方なしと思った。

約十五日間の列車の生活をした。その間、途中停車したら、まき集め、水の補給と忙しい。でも、一足出ると、ソ連兵がダバイ、ダバイと来て、我々の持っていた時計、磁石、万年筆など、手当たり次第持ち去るのでした。バイカル湖を右に見てイルクーツクと、寒さは追々と厳しくなる。列車が到着したところは、タシエツトという小さい町であった。ここで収容所に入った。大きな幕舎で、二段収容であった。私たちが着いたときに、早く来た兵士もあつたらしく、約四千人くらいはいると聞いた。

作業鉄道施設並びに道路工事、日本の今でいう一輪車が最大の道具であつた。その一輪たるや、松の木を輪切りにした車で、車体は松の木を割った板でつくつた、本当に雑なものであつた。夏の作業は暑いが、でも木陰に入ると涼しいので、夏は割合に暮らしよかった。しかし、冬になると寒いのでつらかつた。作業もつらいが、朝の点呼が一番につらい。零下三十度から四十度に近い朝に、一時間から二時間くらい、ときによると半日くらい立ったままである。点呼で人員の計算が合うまで幕舎に入れない。数を数えるのに暇がかかる。四列縦隊から、とうとう十列縦隊に並ぶようにした。二回ほど、逃亡者が出て、その日は作業は中止になったこともある。でも、ソ連人でも、零下四十度を下がると、作業は中止となつた。

食物は黒パンが主食。時折、大豆、コウリヤンを食わせたこともあるが、何といつても、ノルマによつて配給するので、とても一〇〇％仕事ができるわけがない。従つて、食糧は少なくなる。追々と弱り、栄養失調となり、次々と死んでいった。朝起きてこない。隣

の人が見て、死んでいると言う。死んだら、すぐに幕舎の外に出す。すぐにろうそくのように白く凍って、本当に見る影もない。人間の冷凍である。そのように死んでいった戦友はたくさんにある。名も知らぬ。顔も知らない。どこに埋葬したか、私は知らない。収容所で、ロシア兵の残飯を拾いに行つて銃殺された兵士もいた。本当に無残なものである。

私も満州から出発する当時は、体重七十二キロもありましたが、帰国するときには五十二キロになり、栄養失調で、二十二年七月十一日、舞鶴に帰った。満七十歳。今は元気で余生を送っております。これから先何年か、亡くなった戦友の冥福を、毎日毎日、祈つて暮らしていきたいと思っております。

苦難のシル河工事

鳥取県 持田 一男

沿海州ポシエツト港から汽車に乗せられて二十日余

り、到着したところは中央アジア、カザフ共和国のクズオルダという砂漠の中の一小都市であつた。

ポシエツト港を出たのが八月の上旬で、シベリア鉄道を西へ西へと走り、ノボシビルスクから南下して、この地に着いたのはもう九月にもなるうかといふころであつた。下車してから町の中にある公衆浴場で約一か月ぶりに入浴をし、そこからトラックに乗せられて砂漠の中の道を約数十キロばかり走り収容所に着いた。

収容所に着いた私たちは、長い汽車輸送の疲れをいやす暇もなく、翌日から早速強制労働に狩り出されることになった。

我々が、はるばるこの地に連行され、労働に従事させられた真の目的は、ソ連側の計画でこの地に一大コルホーズをつくることであつた。そのためには、膨大な面積にわたる農場へはるか遠く離れたシル河より水を引いてくる必要があり、この水路工事へ日本人捕虜が投入されたのだつた。この作業こそまさに悲劇の連続であつた。